仕事や家庭で
頑張っている親へ
今だから言える

ありがとう。

yell

～子から親へのエール2023～

ダイバーシティ推進実行委員会おかやま
2024年1月31日発行

普段はなかなか伝えることができない
親への感謝の気持ちを伝える論文コンクール

受賞作品集

ダイバーシティ推進実行委員会おかやま
2024年1月31日発行

過去から現在に至る
家族の思い出を呼び起こし、
苦しかった出来事や
うれしかったエピソードと
シンクロして
新たな感情を生み出す
エール論文。

yell

まずは、コロナ禍を経て、今年度エール論文を再開することができたことをうれしく思います。今回も心を打つ作品をたくさん読ませていただきました。前回から岡山県外の高校生や大学生からの応募が増えてきたほか、今回は、今までにも増して、子どもたちにとって「家庭」「家族」がかけがえのない存在であることを強く感じさせる作品と出会うことができました。家族の愛情があふれ出てくるこのエール論文は、読まれる方がそれぞれ記憶の奥に持たれている、過去から現在に至る家族の思い出を呼び起こし、苦しかった出来事や、うれしかったエピソードとシンクロして、新たな感情を生み出すと思います。私は、当事者でなくても、読むたびに、新鮮な感覚に満たされ、幸せになれます。

さて、今回は、少しだけエール論文の舞台裏の話をさせていただこうと思います。具体的には、エール論文の運営費の捻出方法が変わったことをご紹介します。これまでエール論文は、国や県などの公的な事業助成を活用して継続してきましたが、今回から運営費が岡山大学からの寄付によってまかなわれることになりました。その寄付の原資は、岡山大学に集約されはじめた企業の広告費です。広告費を事業経費に活用するスキームは、いろいろなところでなされていると思います。しかし、この冊子はもちろん、関係するホームページ等にも企業広告は出ていません。それなのに企業の広告費のみで事業経費の全てをまかなえるようになったのはなぜでしょうか？その理由は、新たな方法を導入したからです。その方法をご理解いただくことはきっと意味があると思いますので、どうかもう少しお付き合いください。

岡山大学では、4年前より、岡山大学で開発された新しいタイプのｅラーニング（マイクロステップ・スタディ）を正式に採用し、学生が日常的に学習する最後のページに、岡山の企業の先進的活動や、社会的意義のあるメッセージ等を掲載するエールメディアを用意しました。その掲載費を広告費として大学に収めていただき、学生のｅラーニングの運用費とする他、一部をダイバーシティ推進実行委員会おかやまに寄付することになりました。

頑張っている家族を思いやる高校生や大学生を、顕彰という方法で支援するエール論文と、懸命に勉強しようとしている子どもや大学生を企業が広告費という形で支援するエールメディアは、様々な境遇で頑張っている若者を支援する点で似ています。実のところ、エールメディアの枠組みは、エール論文の取り組みを一部参考にして作られたものです。

その経緯はここでは書ききれませんが、エールメディアは高度な技術が詰まった岡山大学発の新しい情報インフラです。大学と地元企業のような異なる機能を持った組織が協力することで、新たなメリットを生み出せることをエール論文の事業から学び、そのメリットをつなげることで持続可能な活動が生み出されたと考えています。さらにその活動が高校生や大学生にメリットを提供し、さらに一般の方々にこのような冊子として感動を届けられるしくみが出来上がりました。メリットをつなぐことで多くの方に感動を提供できるようになったわけです。

これまで、エール論文のメリットを大きくし、事業を安定させるために、岡山県、岡山経済同友会、岡山大学の関係の方々は一緒になって知恵を絞って苦労してきました。今、私には様々なエピソードや関係の方々の顔が思い出され、幸せな思いがこみ上げています。高校生や大学生が描き出すエール論文のエピソードのように、長い年月の苦労があったからこそ、幸せが手に入るのだなと改めて感じています。

ありがとう、エール論文

ダイバーシティ推進実行委員会おかやま
会長 寺澤 孝文
（岡山大学学術研究院教育学域 教授）

論文コンクールについて

「仕事や家庭で頑張っている親へ今だから言えるありがとう。〜子から親へのエール論文〜」と題して、仕事や家庭で頑張っている親に対して、泣いたり、笑ったりしたエピソードや親へのエールとなるメッセージを添えて、働き方の多様性を主に家庭の視点から考えることを目的に、高校生・大学生等から論文を募集いたしました（2023年6月〜11月募集）。

応募があった高校・大学等

秋田県立大学、岡山大学、高知大学、山陽学園大学、聖泉大学、東京外国語大学、人間総合科学大学、福島大学、早稲田大学、おかやま山陽高等学校、岡山白陵高等学校、香川県立津田高等学校、鹿島学園高等学校、川崎医科大学附属高等学校、品川翔英高等学校、常総学院高等学校、湘南白百合学園高等学校、創志学園高等学校、東邦高等学校、津山工業高等専門学校、灘高等学校、明誠学院高等学校

選考は、岡山県内の大学関係者による審査会にて行いました。今年度は、昨年度に引き続き、岡山県知事賞、岡山経済同友会代表幹事賞、岡山大学長賞、入選、本コンクールを通じて多様性の教育推進に取り組んだ学校へ贈るダイバーシティ教育推進学校賞を選考いたしました。2024年1月31日に岡山県庁3階特別応接室にて表彰式を開催しました。

審査委員一覧（50音順）

就実大学人文科学部総合歴史学科
教授 井上 あえか

岡山大学学術研究院教育学域
教授 片山 美香

山陽学園大学総合人間学部言語文化学科
教授 佐藤 雅代（審査委員長）

岡山大学学術研究院教育学域
教授 寺澤 孝文

岡山大学学術研究院環境生命自然科学学域
准教授 樋口 輝久

「ダイバーシティ推進実行委員会おかやま」について

当実行委員会は、大学生等のキャリア教育や情報発信、調査研究を通じて、家庭と企業双方の視点から男女共同参画の推進や働きやすい環境づくりなどダイバーシティの推進を行うことを目的として、岡山大学、一般社団法人岡山経済同友会、岡山県で構成された組織です。

実行委員会構成団体

国立大学法人岡山大学
一般社団法人岡山経済同友会
岡山県

事務局

株式会社ログーデザイン

大学生部門

岡山県知事賞

私で繋がるリボンのエール

福島大学１年　目黒　花織

「がんばれ、がんばれ」

ドア越しに聞こえる嗚咽に、みるみる痩せるからだ、抜け落ちる髪の毛。真っ白の箱の中で苦しむ少女と支え続ける母の姿を黙ってただ見つめていた。

私が小学４年生のとき、姉が白血病になった。入院が決まった日、母から「お姉ちゃんが病気で入院することになったの。病院で看病するからほとんど家に帰ってこれない」といわれた。今まで泣いた姿を見せたことがなかった母が、泣いたのだ。あまりに突然の出来事で当時の私は理解が追い付かず、ただ姉の入院した病院と家を両親とともに往復する日々を送りはじめた。

約1年間闘病生活を送り姉は退院することができた。しかし、数か月後に病気が再発。重症だったことから2回目は臍帯血移植を行うことになった。この間母は、疲れた顔一つ見せずに姉をそばで支え続けていた。それに引っ張られ家族全員が明るく過ごす元気をもらっていたのだ。

時は流れ治療とリハビリを繰り返し姉はもう一度家族のもとに帰ってきた。これでみんなもう一度一緒に過ごすことができる。母も一息つくことができるとこの時の私は思っていた。

その数か月後、私が学校から帰ると母が大きなカバンにパジャマや歯ブラシを詰めていた。胸が締め付けられ「あぁ、またか」と感じた。2度目の再発だ。今までの闘病生活で家族はばらばらになり、共に過ごす時間が限りなく少なくなっていた。学校から帰っていつものようにあたたかく迎えてくれる母の姿をもう何年も見ていなかった。苦しさで胸がいっぱいになり私の感情が爆発した。「なんでお姉ちゃんばっかり、なんで私の家族が…」泣きながら訴える私を母は優しく抱きしめながら「ごめんね、ごめんね」と泣きそうな声でつぶやいていた。

3回目の治療は骨髄移植。正常な血液を作る骨髄細胞を他人から移植する。骨髄バンクに登録した人を対象に、血液のHLAが適合することが移植の条件となる。だが、その確率は数万分の一というかなり低いものだった。ドナーが見つかるまで姉は病院で治療を受け続けなければならない。私たち家族のばらばらな生活も適合者が出るまで続いていく。早くドナーが見つかってほしいと祈るばかりだった。

ある日、母から「移植してくれる人が見つかった」と電話が来た。2か月後には手術が成功し、姉は少しずつ元気を取り戻していった。中高を病院で過ごしたが、無事大学にも通い今では立派な社会人として頑張っている。姉の命と家族の笑顔のためにバトンを繋いでくれたドナーの方にとても感謝している。私はこの日の母の明るい声を生涯忘れることはないだろう。

この想いを形にするために、私は病気で苦しむ患者さんとその家族をより早く元の生活に戻れるように骨髄バンクのドナー登録説明員になった。現在、全国で1800人の白血病患者がドナーを探している。骨髄バンクには58万人が登録しているが、登録期間の55歳に近い50から40代の人が半数を占めている。残り十数年で適合する人の数は減ってしまうだろう。これでは母のように家族を支え続ける人は増えるいっぽうだ。誰もが発症する可能性があるからこそ18歳から2ccの採血でできるドナー登録を一人でも多くの人に勧めていきたい。

骨髄バンクについて話すと「死んだら怖い」と聞く。しかし、日本において骨髄移植による死亡例はない。多くの人が間違ったイメージを持っているからこそ説明員としてこれからも活動を続けていく。白血病患者の苦しみもそれを支える家族の苦労もすべてわかるからこそ、それらを繋ぐリボンの一部になりたい。

病気の苦しみから患者と家族を助けることが私から母へのエールになると信じて、これからも前進していく。

高校生部門

岡山県知事賞

母がくれた宝物

川崎医科大学附属高等学校３年　井上　由貴

私にとって母は家族を明るく照らしてくれる「太陽」のような存在だ。

現在私は、家から遠く離れた学校で寮生活をしている。母は後に私と別れる時、遠いところへ苦労して生んだ子どもを送り出すことに不安があったと、ふと語ってくれた。

私の命は母が幾多の苦労を乗り越えたからこそある。私の母は社会人になった頃にがんを患った。しかし当時はがんの治療法があまり確立されておらず、がん細胞の転移を防ぐためにリンパを除去せざるを得なかった。手術が成功して仕事に復帰してからも、後遺症による腕のむくみに慣れるのに時間がかかったそうだ。けれども仕事に復帰して3年後、がんの再発が発覚した。母はその治療後に私を出産した。高齢での出産だった。幼い頃の私は、学校の授業参観などで親が来るときに、周囲の親が若く見えることを恥ずかしく感じていたが、私の父や母は、他の人よりも長く生き、いろいろなことを経験してきたからこそ伝えられるものがあるんだ、と私にはっきりと言っていた。今から思い返せば、病気を克服した後の出産がどれほど大変なことだったか、私には想像もつかない。

母はもともと陽気な性格ではなかったが、病気を通じてより前向きに物事を捉えるようになった。私にはそんな母が言ってくれた、印象に残る言葉がある。

「私は努力して苦労を乗り越えてきたから、努力をしない人は嫌いだ。」

私はこの言葉は病気に苦しみ、うち克った母だからこそ言えるものだと思う。今もこの母の言葉は、受験期の私の背中を押してくれる。また私は自分の名前が大好きだ。どんなことがあってもあきらめず、強く生きてきた母。私の名前はそんな母にちなんで、「お母さんの貴い宝物」という意味をこめてつけられた。

母は今では、病気を患っていたとは思えないほど自分の好きなこと、やりたいことを精一杯楽しんで生きている。母が私の誕生日に書いてくれた手紙にも「あなたの好きなことに一直線に走って行ってください」と、母のまっすぐな思いがつづられていた。

私には将来がんを治す医師になるという夢がある。日本では検診の受診率が低いため、がんによる死亡率は増加傾向にある。さらに再発した場合、急速に悪化しやすく、治療が困難と言われている。私は、母が自分の命をかけてまで与えてくれたこの命を大切にし、母のように苦しむ人を1人でも助けたい。私にとって母がくれたこの命は、かけがえのない「貴い」ものであり、「宝物」だから。今度は私が母のようなしなやかで強い人になって、誰かの役に立ち、誰かを幸せにできる人になりたい。医師とは、そんなかけがえのない命を救うことのできるすばらしい職業だと私は思う。

また、母は大学と大学院を、仕事をしながら夜間通っていた。ただ世間にはまだ、病気などのやむを得ない事情から、職場に完全復帰できるところが多くなく、また途中で一旦職を離れた場合の待遇が保障されておらず、特に女性の場合は難しいというような社会の状況も残っている。重い病気や、出産・育児のように、人生において一時職を離れなければならない事態は、誰しもが起こりえることだ。そうした時、病気だから、女性だからという理由で仕事を続けられなくなるのはあってはならないことであり、正しいこととは言えない。私は差別に関係なく、病気にやさしい、誰しも仕事を続けられる社会が実現することを心から望んでいる。

高校生になってはじめて寮生活をして感じたことが私にはある。それは家庭の温かさだ。家庭というものが、私には帰るべき場所があるということを教えてくれた。母のぬくもりが私を安心させてくれた。母は私に「つらいことや思ったことがあったらいつでも話してね。お母さんがスカーンと笑いとばしてあげるよ！」と笑って言ってくれた。これからは、私が母にたくさんの笑顔と幸せを分けてあげたいと思う。

最後に、普段は照れくさくてなかなか伝えることのできない、母への尊敬の念と感謝の意をこの論文にこめて、私に数えきれないほど多くのものをくれた母にエールを送りたい。

大学生部門

岡山経済同友会代表幹事賞

落ちて気づいたありがたさ

高知大学 3 年　伊藤　春菜

「お父さん、今日のご飯何？」
「生姜焼きだよ」
「えー、いやだ。いらない」
私は昔からあまり食べなかった。好き嫌いと言うより、気分だった。食事をするよりも、遊ぶ方が好きだった。毎日のように、夕飯のメニューを聞いては、「いらない」と、頑張って作ってくれている父に、最低な言葉をぶつける。なのに、そんな言葉をぶつけられても、食卓にはいつも豪華なご飯が並んでいた。サラダから始まり、生姜焼き、ししゃもに、最後は食後のデザートまで。気まぐれでしか食べない私に少しでも食べてもらおうと、たくさんの選択肢を与えてくれた。

両親は共働きだった。家事は職場が近い父が行う。家事を手伝う夫が「イクメン」と言われるのなら、私の父は「スーパーウルトライクメン」だっただろう。仕事で朝早く家を出て、夜遅く帰ってくる母の代わりに、掃除に洗濯に全てをこなしてから仕事に行き、帰りは買い物をして、シェフの如くディナーを振舞ってくれた。なのに、その料理を私はあんまり食べなかったし、家事をしてくれるのが当たり前で、感謝なんて全くしていなかった。

大学生になって、1人暮らしを始めた。家事をこなすのは大変で、父のありがたみを知る。だけど、大学生活が忙しくなって、連絡も鬱陶しく感じるようになった。
「今日はいい天気だね。調子はいかが？」
「うん」
「こちらはみんな元気です。元気してる？」
「うん」
適当に返してやり過ごした。食事も、スーパーの総菜を1品2品、適当に選んで食べるだけ。家事も適当に。少し散らかった部屋で過ごす日々が続いていた。

大学2年生のある日。いつものようにバイトに行って帰る途中、事故は起きた。自転車で1mほどの溝に落ちたのだ。宙を浮いたような感覚をしてから記憶がない。頭を強く打って、救急車で運ばれた。救急隊の人に「親に連絡しときや」と言われたけれど、父には心配されたくなくて「自転車でこけて、病院に連れて行ってもらいます。」とだけ送った。

額の傷が深く、結局救急で縫う事になった。言わば小手術。当時未成年だった私は、保護者の承諾を得るために、緊急連絡先へ電話がかけられた。父は動揺しつつも、快諾してくれた。無事に縫い終わり、家に戻った。

家に帰ると、父からたくさんの連絡が来ていた。
「明日仕事休んですぐ行くからね。家事も全部やったるから。」
「大事やないから大丈夫。」
そう返したけど、次の日起きると父は来てくれていた。片道5時間の距離なのに、心配で仕方なくて、朝一で家を出ていった。と、後で母から聞いた。

「来なくていいって言ったのに」
そう言いつつも実は会えて嬉しかった。包帯だらけで外に出るのを拒んでいるのを察した父は、1人で買い物に行き、1人暮らしの小さなキッチンで生姜焼きを作ってくれた。懐かしい味だった。今まであんなに食べなかったのに、一瞬で平らげた。父は、
「お腹すかしてたのね。全部食べてくれて嬉しい。生きてよかった。」
と言って私をつぶれるくらいに抱きしめた。
「私も。お父さん、冷たくしてごめんね。」
そう返して、2人で抱き合いながら、その日はわんわん泣いた。

あの日から、私はよく食べるようになった。家事もきっちりやるようになった。たまに作る生姜焼きは、父のとは少し違う味がするけれど、父の温かさを思い出す。一方で、額の傷は1年経った今でも残っている。だけど、それは父のありがたさに気づくのに必要なものだったのかもしれない。

そうして、この文章を書いている。恥ずかしがりなのか、強がりなのか分からないけれど、異性の父に「ありがとう」なんて口ではなかなか言えない。だからこの場を借りて伝えてみる。

お父さん、今まで心配ばっかりかけてごめんね。いつもありがとう。家事すべてをこなして、仕事もこなすお父さんは私の誇りです。今は就活しているけれど、私もお父さんのように仕事も家事もこなすキャリアウーマンになります！

高校生部門

岡山経済同友会代表幹事賞

父へのエール ～私の言葉で社会を変える～

おかやま山陽高等学校３年　橘　里香サニヤ

幼い頃、いじめられて泣いている私に「前向きにね」と頭をなでながら何度も励ましてくれた父。しかし、私はいじめられた理由を父に言うことはできませんでした。

私はインドネシア人の父と日本人の母の間に生まれたハーフです。日本で生まれ育ち、日本語しか話せません。幼い頃から、私の名前を見ただけで「日本語が上手だ」と言って国籍を尋ねてくる人、外国人が事件を起こしたとテレビや新聞で報道されると「やっぱり外国人は犯罪を起こす」と軽蔑し暴言を吐く人など、私は「普通の」日本人として受け入れてもらえない日々に苦しみました。そして何よりもそれを家族に打ち明けることができず、泣くことしかできない自分自身を情けなく思っていました。

そんな環境を変えたかった私は家族の理解と協力のもと、高校入学を機に鳥取県から岡山県に家族皆で引越し、幼い頃からの夢であったパティシエになるために製菓科のある高校へ進学しました。高校ではあの辛かった日々が嘘のように、同じ目標を持った仲間に囲まれ、楽しく高校生活を送ることができていました。

しかし高校1年の冬、岡山市の建設会社で起きた外国人技能実習生への暴行事件が報道された時、父は24年前に技能実習生として来日して以来、日本で暴言や賃金未払いなど不当な扱いを受け続けていることを初めて家族に打ち明けたのです。日本で働けば家族を楽にさせてあげられると信じ、どんなに辛く大変な仕事でも弱音を吐かずに仕事に打ち込んできた父。初めて聞く日本語と慣れない日本文化に戸惑いながらも言葉の勉強を続け、何不自由なく日本語を話すことができるようになったにもかかわらず、父の努力を認めようとせず、漢字が上手く書けないと分かれば「うちの会社で仕事はできない」と言われたり、一ヵ月で仕事を全て覚えられなければすぐに辞めることを採用条件に出されたりと、外国人という理由で正社員として働くことは難しいと何度も言われたそうです。また、仕事の説明や休憩時間を故意に伝えられなかったり、必要な残業をしても「勝手にしているから」と残業代が支払われない理不尽さを経験してきました。そして昨年11月、外国人という理由で父は解雇され、長期間仕事が決まらない我が家は貯金を切り崩しながらの生活で、先が見えず不安で心が暗く沈み、あれだけ不平不満を言わず前向きに生きようと言っていた父でさえも笑顔を忘れかけていたのです。

こんな納得のいかない状況を変えたいと思った私は、今度は私が父を励ます番だと考え、私のできることを探しました。アルバイト代は全て家庭に入れるだけでなく、私の言葉でこの社会を少しでも変えたいと考えるようになった私は、高校で始めた弁論でこの問題を取り上げ、一人でも多くの人に外国人労働者の抱える問題を知ってもらい、私の言葉で社会を変えてみせると心に決めたのです。

今年4月、やっと仕事が決まった父は、私が家で弁論の練習をしていると、「サニヤが頑張ってるんだから、お父さんも仕事を頑張らないとな」と笑顔で言ってくれるようになりました。その父の姿に、私は将来日本で暮らす外国人の支えとなりたいと思うようになりました。言葉が分からず一人で不安な日々を過ごす人、正しく評価されず悔しい思いをする人など、希望を抱いて来日した人が絶望的になりかけている状況を救うために、私は心の支えとなりたいのです。不当な扱いをされる社会ではなく、公平な評価が受けられるように、そして外国人労働者達の現状を知ってもらうために、私は声を上げ続けていきたいのです。

今もなお非正規雇用で働く父は外国人労働者という理由で不当な扱いが続き、公平な評価を受けることができていません。日本で安心して笑顔で生活できるように、そしてどこの国の人でも安心して日本で仕事ができる社会に変えるために、私はこれからも父へのエールとして弁論を続け、私の言葉で日本を温かい社会に変えていきます。

大学生部門

岡山大学長賞

母の話

山陽学園大学 3 年　松本　岳

両親が離婚したのは、僕が保育園年長を迎えた頃だった。深夜に、僕がリビングの扉の隙間を覗くと、そこには、なにやら神妙な面持ちで向かい合う両親の姿があった。あまりに異様な雰囲気を纏った二人を見て、背中の方からじわじわと不安に満ちた気が全身を包んでいった。

父との離婚で、当時、家事育児で大忙しだった母への負担は、更に強く押し寄せた。朝方、母はその日の夕飯の作り置きや、身支度を済ませて僕たちを保育園に送ると、息つく間もなくその足で職場に向かい、日暮れどきに仕事の休憩時間を利用して僕たちを迎えにきてくれた。そして、またすぐに仕事へ出向き、僕たちが寝静まった夜更けに帰宅。それから、翌日の米を炊き、山積みの服を洗濯して、台所の洗い物やシンクの掃除といったあらかたの家事を終えてからようやく床に就く頃には、時計はいつも0時を回っていた。

そんな日々の中で、僕たちと母が同じ時間を過ごすのは、日曜日だった。何か変わったことをするわけではないけれど、毎週訪れるその日を僕は心待ちにしていたし、忙しい母がリビングのソファで悠々と羽を休める姿を見ていると、それだけで特別な日に感じられた。僕は幼心に、母の大変さをどこか感じ取っていて、よく母の仕事着姿をスケッチしていた。その絵を母に見せる度、一瞬、母は微妙な顔をして、僕が表情を伺うと、慌てたように笑顔をつくった。いま思えば、息子が描いてくれる絵が、楽しい家族の風景ではなくて、仕事着の自分ばかりだったことを、心寂しく感じていたのかもしれない。

小学校に上がり、母の力を借りなくても、少しずつ自分のことに手が回るようになってきた僕は、三つ年上の姉と協力して家事分担表をつくった。曜日を目安に、例えば月曜日は僕が洗い物をして、火曜日は姉が風呂掃除。まだ保育園児だった弟と妹の世話も僕たちが並行して行う。母の助けになりたい、その一心だった。

家事分担を始めてしばらくは、慣れない作業に戸惑った。いくら擦っても、熱湯をかけて濯いでも取れない皿の油汚れには心底嫌気が差したけれど、それでも母の喜ぶ姿を思い浮かべると、そんな気持ちはどこかへ消えてゆくような気がした。僕たちが手分けしてやっとの思いで行う家事を、母は数年間、一人でやっていた。母の偉大さと愛情をひしひしと感じ、母への言い表せようのない感謝の気持ちで胸が埋め尽くされた。

とある日曜日の昼下がり、昼食を作っている母が、突然声を漏らした。「毎日手伝ってくれてありがとう。それなのに母親らしいことができなくてごめんね。」

僕はすかさずキッチンに立つ母に目をやった。こちらに背を向けていて表情は窺えないけれど、その小さな背中はかすかに揺らいでいるように見えた。途端に胸の奥がじんわりと熱くなるのが分かった。同時に目の前が霞んでいく。温かな雫が一滴、また一滴と頬を伝い落ちる。愛情と感謝に満ちている。だから温かいのだと思った。僕は手の甲でそれを拭い、息を整えた。伝えないと、と思った。

「母さん、僕は母さんの子供で良かったよ。産んでくれて、育ててくれて本当にありがとう。」

頼りない声に思いをのせて、母に届くように言った。届いてほしいと思った。長くは言えなかったけれど、精一杯の気持ちを込めた。

それから長い月日が経った。24歳になった姉は結婚して、小さな命を授かった。妹は専門学校に進学し、弟は高校生になった。姉の自立をきっかけに、母は仕事を変え、以前よりはゆったりとした日々を送っている。

孫を抱く母の背中に、以前の母の面影を重ねてみた。小さかった背中は、更に小さくなっていて、けれど、まるで澄んだ深海のように、大きな愛情で溢れている。あの頃と変わらぬ母の姿がそこにはあった。

僕はこれからも母への感謝と愛情を忘れず生きていこうと思う。そして、将来、自分に子供ができたとき、母の話を聞かせよう。

高校生部門

岡山大学長賞

自慢の親父へ

灘高等学校 3 年　飯山　怜央

ぼくの父はいわゆる転勤族だ。仕事が大好きな父は昔から、数年に一度は仕事を変え、働く場 所を転々としていた。父は仕事の都合で、東南アジアのいくつかの国をまたいで仕事をしていたため、ぼくは生まれてから数年間、シンガポールに住んでいた。一年のうちでも父と一緒に過ごすことができたのは3 ヶ月あるかくらいの、ほんのわずかな時間だった。

けれどもぼくは父が大好きだった。たまに帰ってくるときも、どこに遊びに行こうかなどの計画を立ててくれていたし、誕生日の時には必ず帰ってきてくれていた。家族と一緒にいたいという気持ちは父が一番強かっただろうに、いつも僕たちには弱音を吐かず、がんばる父がぼくは大好きだった。

小学4年生の時に、日本に移り住むこととなった。今まで違うことがあるとすれば、父の転勤によるものではなかったと言うことだ。どうして日本行くの、と母に聞いても、
「兄弟3人、女手一人は大変なんだ」
とか
「日本人なんだから、普通でしょ」
などと、言葉を濁されてしまった。当時の幼いぼくにとっては、理由も教えられず、友人たちとの別れを強いられたことは、とても理不尽なことだった。

日本の学校生活では度々、シンガポール出身であることをバカにされた。家族含め純日本人であることを伝えても外国人だといじられ、東南アジア出身であることを、貧乏くさいなどとバカにされた。ぼくはジョークとして明るく受け入れたが、バカにされるたびに、自分が今こんな仕打ちを受けているのは、理不尽に日本に連れてこられたからだと思うと、父と母を恨まざるをえなかった。

ある日、二分の一成人式と言う、両親に感謝を伝える行事があることを先生からクラスに知らされた。両親が学校にくる行事ということもあり、クラスでは親が来るかこないかの話題で賑わって いた。ぼくにもその話題が振られることとなり、友人に尋ねられた。
「飯山のとこも、親くるん?」
「おとんはこないけど、おかんは来るよ」
「おとん来ないんや。やっぱ変やなお前の家」

「変」という言葉がぼくの心を抉り切った。シンガポールにいたときは家族が大好きだったのに、日本にきて、一変した。周りの家庭との違いが気になってしまって、バカにされることが苦痛だった。

次の日の朝、ぼくはベッドから出ようとしなかった。学校に行こうとしないので母はどうしたのかと聞いてくる。ぼくは答えたくなかった。両親のせいで日本に来たとして、ぼくが今苦しいことを両親に伝えて、一番苦しくなるのは両親じゃないか、とぼくは知っていたからだ。けれども母のズル休みをするなという無神経な発言に思わず、カチンときて、心の器に溜まったネガティブが言葉になって溢れ出てしまった。

「俺が今苦しいのも全部お前らのせいやろ!なんで日本なんか来なあかんかってん!」
なんてことを言ってしまったのだろうか。取り返しのつかないことを言ってしまったと、慌てて母に謝罪しようとするも、母は
「そう」
と一言だけ残して部屋を出てしまった。

気持ちの晴れないまま迎えた二分の一成人式、気持ちが乗らず、それらしく書いたメッセージで発表をすることにした。けれども当日の朝、学校に行こうとした時に玄関に父のスーツケースがあることに気づいた。父が二分の一成人式に来たのだ。メッセージを書き直したかった。こんな間に合わせのものではなく、本当に心を込めたものを書きたかった。けれども書き直すこともできず、それらしいメッセージの発表で終えてしまった。教室の後ろの父と母の嬉しそうな顔が、ぼくの心にズキンと響いた。その日の夜、初めて日本に住むことになった理由を父から明かされた。父に前立腺癌ができたこと、大事があった時のために日本に移り住むことになったこと。
「無理させてごめんな」
一番無理をしていたのは父なのに。

この場をお借りして、二分の一成人式のメッセージを書き直させてください。

父さんへ
二分の一成人式のメッセージを書き直そうと思ったけど、もう俺も18歳で、いつの間にか成人しちゃってたよ。今こうしてメッセージを書いてる時も、相変わらず、同じ屋根の下、と言うことはないね。俺が楽しく生きられるのも、陰でがんばる親父がいてくれるからだよね。縁の下の力持ちとは言うけど、ちょっと力持ちすぎかもね。これからは俺も背負うから、最高の家族であり続けよう。いつもありがとう、自慢の親父だよ。

入 選

大学生部門

山陽学園大学 3 年
富田 遥香

山陽学園大学 2 年
林 鈴菜

人間総合科学大学 1 年
吉田 莉恩

高校生部門

鹿島学園高等学校 2 年
池内 一惺

常総学院高等学校 1 年
横瀬 日葵

ダイバーシティ教育推進学校賞

おかやま山陽高等学校

岡山白陵高等学校

川崎医科大学附属高等学校

常総学院高等学校

創志学園高等学校

津山工業高等専門学校

明誠学院高等学校

（50 音順 ）